



## 小野 哲名誉会長 開会挨拶

卒業年次を忘れてしまいました…。

戦後、……あ、失礼いたしました。

戦前、同志社の航空部が今出川でパイロット以外に整備役を必要とするという、奨励が神学館前でありました。即座に、ちょうどその時に居りましたので、私はすでに同志社の予科の時代から弓と射撃とやっておりました。私のこの後に記念講演を下さいます千さんと私は全く同じ年の同じ月に生まれている。千さんはパイロットでもあります。したがって今日はそのお話をしてくださるはずです。

まあそんな次第で、航空兵の中の整備兵として私は戦時中の訓練を経て、南京に出かけます。南京修理廠で整備をしろということのようでした。300人の学生が整備兵として日本から朝鮮、奉天経由で南京に送り込まれました。その中の一人でありました。

日本が猛烈な爆撃を食らって原爆まで食らって、GHQは日本を黙らせるわけがありますが、その時、天皇は終戦という手をお使いになって戦争はやめるとおっしゃったわけです。日本は、太平洋戦争に負けたということになっておりますが、天皇様は戦争は“やめた”と仰っています。そのことは、翔友の頭に掲げました、私のつたない文章の後ろの方でご了解いただきたいと思います。

7年間、飛行機、航空を止めるということまでGHQはしました。私はその期間、負けた国の日本の空を、勝ったとはいえ米軍の司令官が、マッカーサーが日本の空を禁ずる、7年間飛行は一切するなというようなことは言えた義理ではないと

私は思うんですが、日本の多くの人は、そして文部省は、それに唯々諾々と従いました。私はまさに、螻蛄の斧ではありませんけれども、模型飛行機を使って憂さを晴らしました。

そしたら、その七年が終わった後で、玉水の砂原で学生航空が再開されるのに出会いました。玉水の砂原に初級機が3機だか4機だか、どっからどう集めたのか知りませんが、その中の一機は今も格納庫に吊るされている、あのプライマリーです。私はパイロットにはなる気がないし、なれないと思い込んでおりましたから、自分の作ったウェイクフィールドという模型の、世界的なクラスではありますけれども、それを作って憂さを晴らしをしておりました。

玉水の滑走路でプライマリーに乗った方は、すみませんがお手を挙げてみてください。いらっしやいます。いらっしやいます。同志社の航空部はそういう形で玉水の砂原からプライマリーを使って活動を再開したわけでありました。戦前は、牧野さん、一鐵五郎さん、伊兵衛さんとおっしゃる大先輩が同志社の航空部を引っ張りました。私はその尻尾に縋って整備兵、整備役は務めました。パイロットにはとてもなれないと思っておりましたので、航空部の部長を引き受けてしまったんです。おかしな話と思われるかもしれませんが、木枝学長が航空部長でした。そして木枝学長は、学長になられたときに航空部がやはり、あの、少し負担になられたんだらうと思います。それで、お前やれ、と法学部の政治学科のメンバーだったんですけれども、私は喜んで航空部の部長を引き受けました。そして、こんにちになりました。

途中で事故がありました。私は部長はやめませ

んでしたが、その福井の航空事故以後は、クラブの頭(かしら)は表に出てはならないと自分で思い決めました。以後、今もそうですが、航空部の後ろにいるつもりなんです。これでも。

どうぞ、パイロットとして、たいへんいろんな仕事をなさった千さんのお話をお聞きください。



## 記念講演 裏千家15代家元 千 玄室様 「私の飛行経験」

本日は、同志社大学の航空部の75周年、誠にあのお祝い申し上げるこの機を得まして、私も大変うれしく、5年前に、この記念講演をというようなことで、台中<sup>※注1</sup>で国際ロータリーの地区大会がございましたときに、私会長代理で参りました時に確約<sup>※注2</sup>させられまして、それで実はこの壇上に立たさせて頂くことになったんです。

ところが、新聞事情でもご存知のように、三笠宮両妃殿下の70周年の結婚の日が今日でございますので、ちょっとお祝いに参上しなければなりませんので、講演の時間を端折らせて頂きますのでどうぞご了承頂きたいと思っております。

時間があまりございませんのでお話しあげます。

私、小野さんが仰った様に大正12年の4月の生まれでちょうど同じ歳、本年88歳でございます、私は小野さんも先ほどお話にも御座いましたように戦前の大学で学んだ男でございます。

昭和14年に同志社中学の4年生の時にですね、今龍谷大学がございます伏見の練兵場の方で、当時あの練兵場は非常に広うございまして、そこでですね、府下の中等学校のグライダーのですね、まあグライダーといいましても上へあがるのではなく、地上でゴム索を引っ張ってですね、少しこー飛ぶようなまねをするというような訓練が行われたときに、私もそれに参加致しまして、はじめてプライマリーに乗ったのが私の飛行機の始まりでございます。

まあそういうことから、実は私、同志社大学の法学部の経済学科を卒業致しましたのでございますが、昭和21年の卒業組でございます。それは2年間海軍へ行っておりましたために、2年間遅れ

ましてそれで21年に卒業ということになったわけでございますけれども。

ちょうどあの、私が飛行機になぜ乗ったのかと申しますと、実は私は中学時代から馬術でございます。馬術が専門でずっと大学も馬術部で、予科、大学と馬術部で過ごしたんでございますが、たまたま、もう単なる馬が徴用されまして、お国のために出ていく、まあ無くなりましたので、騎兵や輜重の連隊へいきまして、そこで馬の訓練をしながら私たち馬術部は色々勉強させて頂きました。

昭和18年4月にですね、たまたま大学の掲示板のところ、陸上機ばかりだと思っておりましたら、学生航空連盟の中に水上機が新たに設けられ、これは琵琶湖の膳所の天虎飛行場というところで乗員養成訓練所でございます、その乗員養成訓練所がですね、予備海兵団ということで、水上機専門の訓練をするということで、各大学から選抜募集をしました。私の友達が剣道部におりまして、西田ケイイチというのが、私に「どう、これやってみいひんか」ということで。実は軽い気持ちでですね、当時配属将校のカメヤマという大佐がおられまして、陸軍の。カメヤマ大佐の所へ行きまして、書類を頂きましたら、私の顔を見てカメヤマ大佐は、「なあ、千、これ、乗るのに親の承諾書があるよ。」といわれましたんで、私もまあまあまっと思ひまして、私もそのまま「大丈夫です」というようなことを言って志願をしたわけです。

合格したら今度はちょうど同志社大学からは7名合格致しまして、各大学からみなそれぞれ5名ないしは6名、全部で20名でございます、それで私はふっと見たらここで訓練終わったら陸軍が海軍かの飛行機の方に行かなきゃいかんというよ

うな誓約書があったわけです。これはえらいこつちやと言いまして、母のところに、「実は、まあ戦局もこんなになってきたんでグライダーに乗る、まあ、徴用されても仕方が無くなってきたわけで、グライダーの訓練をしたいと思います」と。

まあ、母も「それならいいでしょう」とハンコを押してくれました。それを出しまして、そして4月から教練免除、ただし午前中は学業に専念しろと、午後からは天津の膳所の水上機の訓練所に行つてそこで訓練をしろと。

各大学の選抜でございますから猛者がそろつておりました。そこで海軍式の体操から手旗信号から一式覚えましてそれから九三式水上機の赤とんぼ、下駄履きで、そこで水上機の訓練を受けたのです。毎日毎日だいたい4月から10月まで私は7か月間の間に、毎日20～30分は、ガソリンも豊富でございましたから飛行作業をどんどんさせていただきました。

まあ、整備の方もいろいろと学ばせて頂きまして、そういうわけで、8月に近江舞子の手前のごとこでございます、海岸のところ飛行機4機持って行きまして、そこで合宿訓練を1か月間やりました。そのおかげで単独飛行がだいたい17時間くらいでしたかな、単独飛行ができるようになりました。

まあ、水上機はもちろん、離水、つていうのは、陸上機もそうですけど割合にやりやすいんですけども、着水、着陸は大変難しい。特にフロート持っておりますんで、突っ込みますとそのままだんでんがえし。海軍が三転着陸ということ、のちに我々もやらされたんですけど、フロートのケツをボーンと付けてトーンとして、スーッと波に乗っていくんですが、大変言うは簡単ですけど

もなかなか、操縦桿握りますと重たいんですね。だいたい比叡山の上は非常に風が強くて変わりやすいもんですから飛ばされる率が多い。当て舵、当て舵ヨーソロ。海軍ではヨーソロっていうのは宜しく候つていうのは船の上でみなやるわけですねえ。面舵ヨーソロっていうのと同じように、上へあがりまして、右、1度ヨーソロというようなことで角度を替えていくわけですね。そういうことで、ちょうど飛んどりましたら、9月に航空記念日ということで、当時の宮様、閑院宮がお成りになったと。そこで我々タイガン飛行<sup>※注3</sup>させて頂きました。ところがそれが新聞にでかてかとお出たもんですから、それがおふくろに見つかりまして、「あんたグライダー乗つてんのに、なんで飛行機乗つてんのや？」大変油をしぼられました。ちょうどたまたまその時に徴兵猶予取り消し、ということでございまして、適齢期、大正9～12年までの学生、法文系の学生の適齢者は全て学業を放棄して戦場に赴けと、いうことで徴兵検査を受けさせられることに。

甲種合格、第一乙種合格、第二乙種合格までの現役でございます。私は体重がちょっと足りませんでしたので第一乙種合格ということで「陸軍か海軍か」徴兵官に言われました時に「海軍であります！」と言いましたら、見て「ああ、あんた水上機やるんやつたな」と言われまして、それから私は「もうこれは海軍や」と、仲間はずれにされたんですけど、海軍の者はゆつくりしまして、通知がやるときまして、海軍へ入隊という事が決まりまして、昭和18年の10月、土浦の航空隊へ入隊いたしました。

そこでまた試験を我々受けまして、当時、海軍飛行専修予備学生という制度、まあ兵科という予

備学生もありました。兵科の方は後に回天とか震洋とか人間魚雷に乗ったわけでありまして。私どもは飛行科を志願いたしまして、そして試験を受けまして、合格いたしまして、土浦の航空隊で3か月間の士官教育を受けました。まあの、海兵隊の方々のおっちゃんでございます。私どもは、スペア、スペアと申されまして、本当に予備みたいなものですね。スペアタイヤみたいなものがございます。

3か月間の訓練を終わりますと、もう大変海軍ではですね、事故防止ということを第一に、それでも慎重に慎重に構えまして最後に機種いろいろ選定というふうに。それで私は戦闘機を希望したんですが、背が大きすぎて…だいたいあの戦闘機、ご覧になったこともあるかと思いますが、今、靖国神社の遊就館に零戦が飾ってありますが、こちらに飾ってありますグライダーよりも少し多きなものでございまして、海軍はカボックという救命胴衣、飛行服の上に、それから落下傘バッグ、それで落下傘は座席のところに置いてございます。高さはもうこれくらいの、ちょうど20cmくらいの高さで、もこーっとしてまして、そこへ座りますんですから大きいものですと風防が閉まらない。それで私はもう大型機へ行けと言われてまして、そして偵察機にまわったわけです。まあのそれが第一に命を永らえたひとつの原因でもあったわけです。

で、水上機へ行けると思っておりましたら陸上機へ回されまして、そして徳島の海軍航空隊で実戦訓練を受けていた訳です。私乗りました飛行機は三菱の九〇式の二号、白菊という可憐な名前のもう大変性能のいい飛行機で御座いまして、大体乗員が4名、乗れるわけで御座いまして、全長が

約10m、それから、まあの…、エンジンが中島の空冷式の八気筒、580馬力を一つ積んでおります。最大速度が235km/h、130knotぐらい、出るわけです。大変いい性能の飛行機で御座います。で、航続距離が約1000km、そして、上昇が6000～6500まで、でも我々はもう訓練は3000m以下で訓練すると。それ以上上がりますとやはり酸素の欠乏というようなことになってまいります。3000m以下で訓練を。まあの10か月間徳島でございますね、あの…、亡くなりましたけれども、ちょうど私の相棒に、水戸黄門をやりました西村 晃、まあのこれが背が低いんですね、一番背が低い、私は大きい、まあの一度千少尉、西村少尉ということでペアを組まされましてもうなんかへまをしますと飛行場で「6歩前へー！」ということで、飛行場の前で「股開け!」、6発7発くらい修正を受けると…。とにかく殴られない日は無かったわけです。海軍少尉になってもまだ殴られておりました、だいたい毎日毎日、私つけておりましたけれども、いっぱい278発殴られたという手帳が残っているわけでありまして。

しかしながらそれで鍛えられてですね、事故死しないように緊張感を持ってた。まあのそういう間、私は水上機の訓練で操縦桿を握っておりますんですから。そんなこといってあれですけども、他の学生たちよりも非常に覚えめでたきということで、最初に単独飛行をしたのも私で御座いました。

それから戦局がだんだんだんだん悪くなってまいります、私は偵察機だから大丈夫だと西村晃といつもそう言っておりましたら、なんのなんの、いよいよ偵察機を改造しろと、「エーッ」。ということになってまいります、偵察機は戦闘能力

がございません。7.7mmの、7.7mmってこんなもんですが機関砲を一丁積んでおります。旋回機銃ですからあまり戦闘能力が無く、あくまで偵察。そういう意味におきまして、偵察して逃げて帰ってくるというのが、だいたい私らの戦法で御座いました。

昭和19年の12月にその全部、改造しろと。改造しろって何だと思いましたが翼の下にですね250kgの爆弾、われわれの言う25番、これは250kgあるんですが、その25番の爆弾を翼の下に直ぐに吊るしまして、4名の乗員をですね2名にしまして、まあ操縦員と一名は偵察員、まあそういうような構えで電信機器がひとつ7.7mmの機関砲が一つ、そういうそのあれで減らしまして、そいでその訓練をするんですが、最初は模擬爆弾、同じ重さの250kg両方について、上がるんですけども、徳島の今自衛隊が使っております、民間航空機も使っておりますあの飛行場です、ガーツと走ってもなかなかもう上がらない。端の端までいってようやく、こう、クァーッと上がっていく。まあ、あのレバーももう一杯いっぱい、もうエンジンフル回転でもう、ガタガタガタ…こうヨタヨタと。西村が後ろに乗っかって、よく「千！俺を殺すなよ！」といつもその怒鳴って伝声管で。それでいろいろと特殊訓練で大体2000m位の高度がありまして。2000mの高度からダイブしていく、突っ込んでいく。そうしましたらものすごくGが掛かるんですよねさっきも言ったように。グァー……と肩に。もうホントにそれに耐えなきゃいかん。そういう訓練ばかり。それから夜間飛行ですからこんどは計器飛行をしなければならない。ちょうどあの沖縄に参りますのに、われわれは徳島から出まして、そして海軍はあの

知覧は陸軍で、陸軍の少年飛行兵を養成しております、まあ有名だったんですけども、海軍は反対側の鹿屋、鹿屋の基地、鹿屋とそれと鹿屋ではもう満杯になりましたんで、ちょっと離れたところの檜田ってところに。檜田と鹿屋が海軍の基地でございました。

今もあの鹿屋の自衛隊の記念館がございますんでみなさんお時間があつたら海軍の方も行って頂いて、鹿屋の基地の記念館には我々の散華した仲間、そして西村と私のいろいろなあれも残っておりますんでご覧あそばしていただいたら嬉しく思いますんで。

まあそういうことで昭和20年の4月に特別攻撃隊編成が徳島海軍航空隊に下りまして、ちょうど我々予備士官110名ずつ、海軍兵学校を卒業した士官が30名くらい、あとは甲種飛行予科練習生、17~18歳のですね訓練を受けて、二等飛行兵曹という下士官の一番下です、になりましたその可愛い坊やが大体それが100名くらい、その位が搭乗員として偵察、操縦、それから整備、まあそういうような編成で御座いましたが、熱望する。希望する。否。官姓名を書いて出せ、ということです。まああの官姓名を書いて出さなければならないので私は当然“熱望”と言うところに○を致しまして出しまして、それから一週間後搭乗員整列がかかると、我々整列いたしましたら全員特別攻撃隊員として只今より特殊訓練に入ると。カワモト大佐という司令から命令が下りまして、4月から特別訓練に入ったわけです。夜間飛行、計器飛行、それから爆撃、それからいろいろな特殊訓練を受けまして。まあ綺麗な眉山という山があります。あの眉山というのを目標にして、眉山ヨソロという言葉ですね、本当に毎日毎日、朝から晩まで



あの近海、そしてまた大阪の上、それから太平洋上へ出まして訓練を続けました。

そして5月の3日に命令が出まして、皆鹿屋の基地に移動しろと、私はお茶の家の息子でしたから当然茶箱という携帯のお茶の色々なセットを持っており、いつでも飛行作業が終わりますと西村から「おい千、お茶にしてくれるか」ということでまあ即席の野立て、従兵にやかんのお湯を持たして、虎屋の羊羹を切って、そいで皆にお茶を飲ました。皆「美味しいなあ」と喜んでくれました。でもう大体最後だなと思ったんで、私はふっとお茶に皆しようかなと思っている時に西村が「おい、お茶にしてくれっか」と、それがちょうど鹿屋に出発する2日前でございまして、昭和20年、1945年の5月の2日でありまして飛行作業が終わりますと、みな7、8人集まってきました。で、私はお茶をたててみなに、そのうちの仲間の一人のハタオヨシカゲという京都大学出身の少尉で御座いまして、これがお茶を、グーツ美味しそうに飲んでくれまして、私の顔を見て「なあ千、俺生きて帰ってきたらなあ、お前ん所の本当の茶室でお茶を飲ましてくれや。まあ門前払いすんなよ」と言うようなことを、まあ冗談ですすねえ、お前のところの茶室でお茶を飲ましてくれよ、と。それ言われました時にですすね、“生きて帰ってくる”いや、俺らは生きて帰ってこれないんだ、出たら終いなんだ。と思いました時に、そのとき初めて“死”というものと本当に直面しました。もう、なんかこう“ううっ”とこみあげてくるものがありまして、そいで私はずっと立って、国の方を向いて「お母さん！」と叫んだんですよ。まあ母親に、親には申し訳ありませんでしたけれども、母親にもういっぺん頭なでて貰いたいなあと、母

親にもう一度元気付けて貰いたいなあと、まあはっきり申しますと何かにつけて母親が面倒みてくれた、まあ先立つ自分たちの不幸を許してもらいたいという気持ちで「お母さん」と呼んだんですよ。

そしたら、そこにいたハタオも西村も皆立って海の方を向いて、「お母さん」と。もう皆涙ぼろぼろ流しながら「お母さん」と叫びました。

そしてその後、ハタオヨシカゲは我々の仲間では第一番に鹿屋から出撃致しまして、1945年5月26日にハタオは体当たりを致しました。それから順番に皆当たっていきました。わたしと西村は一番最後まで残されまして、262柱、今も沖縄近辺に皆眠っております。遺骨もありません。飛行機と一緒に残骸と共にあの海底に眠っています。

私と西村、西村は7年前に亡くなりましたけれども、一緒にいつも慰安の旅を続けました。そしてみんなにお茶を供え花を供え、安らかに、安らかにと祈ってきました。西村も私も口には出しませんでしたけれども、この65年間忸怩たる思いでまいりました。なぜおれが残されたのか。行く寸前に下ろされて待機命令がでて、私はそのまま松山の基地へ戻りまして、予科連練習生たちを指導致しました。そして終戦を迎えて助かって帰ったわけであります。

私はグライダーから始まってセカンダリー、プライマリー、そして土浦の航空隊でそれが大変役に立って、教官からお褒めの言葉を頂いて、そして飛行機乗りになりました。2年間の飛行機乗りの搭乗員としての生活は、過酷なものでありましたけれども、私にとってはもう忘れられない一つの大きな試練でありました。そういう試練を乗り越えてきてこそ、私達は戦後のあの廃墟の中から

立ちあがることができた訳であります。

同志社大学に復学致しました。もう陸軍の軍服、海軍の軍服、着た者がうろうろしておりました。まあ、戦後のいわゆる復員組というのは別のクラスに設けられまして、そして復員組だけが特別の講座を受けて卒業させて頂いたわけであります。ですからそういう意味におきまして私は戦後もです、アマチュア飛行連盟の方に入りまして、そしてセスナをずいぶん自分でいじってまいりました。もう、本当にあのお茶の家元が、と言われますが、やはり、静の中に動、飛行機は空を飛びますけれども、あれは沈着であり、そして決断力がありそしていろんな面においてあの、やはり周囲全てに油断なく見渡す、そういういろんな訓練を受けた訳であります。特に計器盤とにらみっこする、計器盤が少しでも狂ったらもう駄目で御座いまして、エンジン不調、そういうこともずいぶん御座いました。

ですから私あの天虎で第一番にその所長のあの藤本直という大変な有名な飛行機乗りがおりまして、その藤本所長に最初に操縦桿を握られた時に、「俺の操縦を観とけよ」と。後ろと前と一緒にですから、前に藤本さんが乗られて操縦されると、その操縦桿の動き、フットバーの動き、それ見とけと。そして降りてこられてから、「千君なあ、お茶で袱紗さばきするのと一緒や。操縦桿を過度に動かしたらあかん。やわらかく、スー、フーと、フットバーもすーっつと前に、当て舵、バンク、そういう当て舵のとりかた、すべてそういうことはお茶と一緒にや」と、だからそういう気持ちで飛行機をお点前をしながらやっていると思ったら間違いないと教えられましたことを、海軍に入ってからでもそれを一生懸命やりました。で

すから御蔭で私は事故無く引き上げて来ましたけれども、そういう意味におきまして私は、この航空部が75年を迎えられたと、私は実戦の経験がありますけれども、実戦の経験が無い方々ばかり、平和の今の日本に飛行機乗られることは大変素晴らしいことだと思います。

まあいろいろ競技というものは大変だと思いますが、どうぞひとつ、すばらしいグライダーで皆さん方が技を競われる時には、まず一服のお茶を頂いて、そして、静かな明鏡の境地に入ってから操縦桿を握られたら、きつといい風、そしてきつといい飛び方ができるものであろうと思っております。怖がったら駄目。怖がったらダメ。我々は怖いもへったくれもなかった。とにかく乗ってです、飛んで死ぬということなんです、乗って飛んで死ぬと、これだけなんです。ですから毎日乗って飛んで死ぬと。

はい、それでおわり。どうもありがとうございました。

(編集長注)

※注1 台湾の都市名

※注2 参加していた新庄委員長がお願いをし、確約を頂いた。

※注3 琵琶湖の対岸の意味と解せるが、録音の音声どおりタイガンとした。



## 政 志郎会長挨拶

本日はご多忙の中、また、降り込みの雨もちょうど止みました。

今日、75周年記念式典にご出席賜り誠にありがとうございます。私、翔友会の会長をしております政でございます。この式典には同志社大学大谷総長様、八田学長様、龍城副学長様、また、真銅学生支援センター長様のご来場を賜り、ユニオンからは濱会長様、藤原理事長様、佐野最高顧問様をはじめ、体育会25部の会長様、併せて、日本学生航空連盟・吉田専務理事様、神戸大学・関西学院大学・関西大学・立命館大学・大阪工業大学・龍谷大学の会長様もしくは監督様主将の皆様のお祝い金を賜っております。心よりお礼を申し上げます。

航空部の歴史を少しお話させていただきますと、昭和5年4月27日日本学生航空連盟関西支部が発足いたしました。それから6年後、二・二六事件が勃発し、軍国時代の台頭を現した年・昭和11年12月4日同志社大学航空研究会が誕生いたしました。誕生直後の状況として、グライダー・飛行機の全国競技会で、再三、全国制覇を成し遂げ、学生航空の発展に寄与いたしました。20年の終戦に伴い航空活動の休止等ありましたが、昭和27年3月GHQは、航空管理権を日本に返還しました。昭和27年6月1日学連再開、同志社大学は昭和の27年5月再開いたしました。その再開後3年せずして昭和の30年11月プライマリー、これは後で見ただけだと思いますが、霧ヶ峰ハトk-14を購入いたしました。昭和37年10月ソアラ・AEOLUS、昭和43年8月AION、昭和55年1月AEOLUS II、これは50周年記念事業として購入いたしました。また、AION III・アレキサンダーシュライハー・ASW28、学生滑空界きっての最

新鋭を75周年記念事業として購入いたしました。滑空比はなんと48でございます。元学長の住谷先生が言われた空力的設計のほとんど究極に達したものでございます。機材は充実してまいりました。現役学生にはここ数年、10人前後の入部者を抱え、往年の姿に戻りつつあり、恵まれた教官に指導された有資格者も増えつつあり、厳しい訓練と、監督の方針に基づく人材の育成により、お互いに進むものを持ち、おのずからを比しつつ、目標を追求していく姿が実現されつつあり、将来に向かって希望のあるクラブ活動になりつつございます。今後、100周年に向かって田辺校地にグライダーの練習場を作っていただくことを悲願しております。

さて、そのグライダーとは、祝賀会のVTRにあるグライダーが滑空する姿を見ていただきますが、自然に溶け込み、それに共存し、自然の力を最大限に利用して空をかけることの楽しみを磨こうとするスポーツでありますのと、また、雑音に妨げられることなく、機体を撫でる風の音を緩やかにめぐる地上の風景を友として上昇気流を求め、自由に空を滑ることのできる、スポーツと思います。ご出席の皆さんも一度、グライダーで空を翔ることを体験していただければ、その素晴らしさが肌で感じられるのではないかと私は思います。

最後に、航空部がここまで発展することが出来たのは同志社大学の良心教育を目標とした、知育・徳育・体育である同志社スポーツの信条である3つのF、フェアプレー・フレンドシップ・ファイトングスピリッツの賜物であります。創部以来、諸先輩の方々の並々ならぬ熱意・創意工夫・努力で今日の姿に発展致しました。誠に有難く思っております。この偉業をしっかり後輩に伝え

ることが重要であると確信をしております。

さて、この75周年記念事業開催にあたり5年前に実行委員会を立ち上げ、20数回に及ぶ会合を経、問題山積の中1つ1つ解決しつつ、ムード作りに精励してくれました新庄委員長、松岡事務局長に、その熱意と努力を感謝感激いたしますとともに、翔友75周年記念号の発刊、募金集め、に努力されたOB幹事の皆様、現役の学生の皆様にお礼と感謝を申し上げます。併せて、新機体購入に関しましてスポーツ支援課元課長の水田さんに変にお世話になりました。どうもありがとうございました。また、翔友会の皆様には度重なる寄付をお願いいたしましたところ、快諾していただきました。おかげさまで最新鋭機のASW28-18を購入でき、学生諸君の眼の色が変わりつつあり、滑空比を追い求める姿に将来の明るさの兆しを見たことも感謝すべき大きな事だと思っております。

ご出席の皆様には感謝を申し上げ、また京都全日空ホテル様にも心からの対応していただいたことを感謝申し上げますとともに、毎日放送の西村様にも有難うございますと申し上げたいです。

本日75周年式典にご出席頂きましたこと、本当にありがとうございました。

## 山口 博志部長挨拶

只今紹介にあずかりました山口で御座います。まず、なにはさておき、同志社大学航空部75周年を迎えて畏敬が胸に堪えません。75周年と申しますと、昭和11年、1936年になります。同志社大学が創立されたのが1870年。136年ですからいわば航空部というのは同志社大学の歴史とともに歩んできた部となります。

昭和11年の頃ですが、小田 幸雄先輩と五名の部員の方々が構想されましてこの部というものが誕生しました。当時、日本では、ちょうど航空機の発展、発達の黎明期でございまして、話に聞きますと当時の練習というのは実際モーター付き、エンジン付きの飛行機で訓練を始めていたということをお聞きしております。その後グライダースポーツの根本でございまして、グライダーというものが始まりました。当初は、プライマリーといいますが、日本中の学生たちが空に飛ばしていたものになります。その頃、グライダーを空に上げる手段というのがゴム引きのようなもので、この中でそういうのを体験された方々もおられるのではないかと思いますけれど、通称パチンコというもので空に上げて滑空していたというお話を聞きます。今からしますと非常に幼稚な手段で飛行していたことだと思うのですが、おかげさまで先ほど政会長のほうからご案内がありましたが、現在最新鋭機、ASW28 というものを我々のクラブで購入して部員の訓練に当てております。現在現役の部員が21名。それから機体は6機ございまして二機が現役を退役いたしました。格納庫に飾っております。4機が今のところ学生の訓練にあたっていて、実際競技に参加しております。ただ今申し上げた通り航空部の歴史というのは、同志社大学の歴史とともに歩んできたわけですけ

れども、その間、日本学生連盟の加盟校として数々の優秀な成績をあげまして、また各界に対して数多くの人材を輩出しております。いわば、文武両道のクラブでございまして。

有史以来、空への憧れというのは私たち一般に人間として持っているものでありまして、ギリシャ神話にイカロスという神話が出てまいります。イカロスというのは自由を求めて空を飛んだ神話として、空を飛ぶという初めての内容だと思えますけれども、その後レオナルド・ダ・ヴィンチという、これはイタリアの有名な芸術家でもありますし学者でもございまして、グライダーの原型を作りました。今でもそのグライダーが実際、模型ですけれども人を乗せて飛んだという話は聞きませんがダ・ヴィンチ自身がそれを実験に使って飛ばしたというふうな可能性もあるということで、今調査されているらしいです。そのようにして私自身の研究も有体力学でございまして実際飛ぶということにも関係あります。このように航空機というのは人類の発展とともに進んできたものでございます。さきほど言いましたイカロスのような空への憧れというのはやはり我々が心に持っている自由への憧れというものは非常に大きなものがあります。私たちは地上の動物でありますから空や海に行くにはいろんな手段があるわけでありまして従いまして私たちはチャレンジという精神を常に持ってあたらなければ空を飛ぶことはできません。また空というものは道がありません。ですからパイロットは常に気候を気にし、天候を気にして自分の行く道を自分自身で模索して飛ぶのでございます。でありますので何かそういうことを考えますと人生というものの進み方、生き方に通じるものがある。航空機の競技自身にあるのではないかと

と思います。そういう環境の中でこれまでたくさんの学生君たちが共に学んで友をつくり、空を飛んできたというのは非常に幸せなことではないかと思います。この75周年に際しまして今日これからでございますけれども、皆さんの75周年を振り返るということと、さらに自明のことはこれから75周年を思うということも大事なことだと思います。そういう意味で皆さんとともにこの部がますます発展することを祈願いたします。

最後に今回の企画、立案、さらに運営していただきました翔友会のOB、OGの皆さん、それから生徒諸君、本当にありがとうございました。心より感謝の意を表しまして私の挨拶に代えさせていただきますと思います。本日は75周年本当におめでとうございます。



## 総長 大谷 實様祝辞

ただ今ご紹介にあずかりました同志社総長の  
大谷でございます。本日は同志社大学体育会航空部  
の創部75周年記念式典がこのようにたくさんの皆  
さんとともに盛大に開催されまして誠にめでと  
うございます。心からお喜びを申し上げます。ま  
た翔友会会長、それから実行委員長、山口部長、  
それぞれの皆様のご尽力によってこのような式典  
が開催されましたことを心からお喜びしますと  
ともに、ご尽力に対して敬意を表する次第でござ  
います。

1936年、先ほどの政会長からもご紹介があり  
ましたように、当初は同志社航空研究会として誕生  
した会でございますけれども、その後同志社大学  
体育会航空部として75周年を迎えられたわけで  
ございます。その間、関西の学生航空会及びグライ  
ダー会の雄として活躍されて多くの輝かしい成績  
を残されてまいりました。近くは2010年度の第34  
回同立対抗グライダー競技会、そして第7回目の  
関関同立対抗のグライダー競技会、いずれも団体  
で優勝という輝かしい成績を残されたわけでござ  
います。山口部長、そして森川監督、その他OB  
の方々のご指導、御苦勞、ご助力の賜物と感謝申  
し上げるとともに深い敬意を表する次第でござ  
います。

在学生の部員の皆様におかれましてはこれから  
全日本グライダー選手権に向けて精進を重ねられ  
ると思いますけれど、どうかぜひ優勝を目指して  
がんばっていただきたいと思います。同志社ス  
ポーツの精神としましてしばしば引き合いに出さ  
れます「3F心」、Fighting spirits、Fare play、そし  
てFriend ship、この3F心をどうか体得されまし  
て、良心を手腕に運用する同志社人として生き、  
ゴールするまで歩まれることを心からお祈りし、

期待する次第でございます。

最後になりましたけれども翔友会のますますの  
発展と同志社大学体育会航空部のいよいよの進化  
発展をお祈りしまして、ご来場の皆様方のご健康、  
ご多幸をお祈りいたしまして、甚だ簡単でござ  
いますけれどもお祝いの挨拶とさせていただきます。  
本日は誠にめでとうございました。



## 学長 八田 英二様祝辞

同志社大学学長の八田でございます。同志社大学体育会航空部は75周年をお迎えになりました。心から教職員を代表して御祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。またこのような75年の歴史を歩み、そして築いて来られたOB・OGの諸先輩の皆様にも深く敬意を表したいと思います。皆様の伝えてこられたトーチが75年の間、今は現役の手に届いたわけでございます。

またこの盛大な祝賀会、記念式典の準備にあられました関係者の皆様にも深く敬意を表したいと思います。同志社大学体育会の中にこのような75年の歴史を誇られる航空部があるということは、私ども大学にとりまして大きな喜びであります。また輝かしい成績をおさめてこられました。最新鋭のAIONⅢの命名式には招待をいただきまして、すばらしい機体を見せていただきました。八田学長も是非とも乗りにきてくれというご招待を受けております。今来ておられます龍城副学長、9月に何か乗る予定だということお聞きしておりました。都合により中止になったときいております。是非とも次回はということで龍城副学長、期待しております。龍城副学長の感想を聞いて私もその内乗せさせていただきたいとそうように考えております。

航空部75周年、大学に関しましては、ご存知のように1875年、明治8年に出来上がりました。今年は136年、同志社英学校からの歴史を築いてまいりました。大学という形になりましたのは1912年でございます。新島襄が存命中はなんとか大学を作りたいという強い願いを持っておりました。しかし彼の夢が実現することは存命中ありませんでした。ようやく新島襄が亡くなって22年の歳月が経った1912年に専門学校令による大学という形

で出発いたしました。初代の学長はラーネッド博士でございます。京田辺のラーネッド記念図書館という名前に、それが継がれております。ただ旧制の帝国大学と同じような徴兵猶予という制度がまだいただけませんでした。同志社大学に行くよりは旧制の帝国大学に行つてということで、なんとか同志社大学も旧制大学、帝国大学と同じような徴兵猶予をほしいということで結局、旧大学令によりまして帝国大学と同じような特権が与えられたのが1920年です。そこから数えますと同志社大学今、91年目ということになります。1920年からスタートいたしますとそれの16年後にこの航空部が出来たという事になります。

同志社大学は新島襄の考え方によりまして、知識のみならず知恵の部分、どのようにしてそのような知識を人類、社会の平和のため、繁栄のために使うのかという知恵の部分を含養、いわゆる人格形成も重視をしております。人格形成に関しましては教室で、教授があるいは先生が教えるという事だけで出来るわけではございません。やはり学生がどのような本を読み、どのような所に住み、どのような人と付き合ったか、そしてどのような友人関係を結んだか。このような学生相互の生活の中で人格形成は出来るものだとは私は考えております。そういう面において体育会の中の各部、とりわけ航空部での学生の生活自体、私はこれは人格形成そのものである。いわゆる航空部に関しましてはその面で同志社教育に75年の間、貢献してこられたと私は理解をしております。

私、学長になりまして、このような、体育会の各部の人格形成における同志社教育での貢献、これは非常に大きなものである、というわけでいろいろと体育会の活動に関しては支援をさせていた



だいております。さきほどの政会長のほうから100周年をめざして、大学の京田辺に何か練習施設という話も出ておりまして、それはまた後ほど龍城副学長あるいは真銅学生支援センター所長、あるいはスポーツ支援委員会というのが何年か計画でいろいろと体育会各部に対する支援を行っております。そこでまたお話をして頂いたらいいのではないかと考えています。

話が長くなりましたが、私はそういう面でこのような体育会の長い活動というのは同志社教育の人格形成そのものではないかと、そのように位置付けております。そのような面におきまして航空部のOB・OGの皆様には長い間、75年にわたって同志社教育に寄与してこられたということに厚く御礼を申し上げたいと思います。これから76年、77年、100年を目指してあるいは200年、300年を目指して永遠に同志社大学体育会航空部は発展をし続けていかれるものだと私は確信をしております。

最後になりましたけれども、本日お見えOB・OGの皆様方、また現役の諸君、そしてスポーツユニオンの皆様方、皆様方と共に体育会航空部のますますの発展を祈念いたしまして私のお祝いのメッセージとさせていただきます。75周年誠におめでとございます。



## スポーツユニオン会長 濱 直樹様祝辞

皆さん、こんにちは。本日は、体育会航空部さんが創部七十五周年という記念すべきよき日をお迎えになられました。誠にありがとうございます。卒業生の皆さん方のお喜びも、また現役の方々のお喜びもひとしおだろうと存じます。私たちスポーツユニオンも、この上ない喜びでございます。

また本日は、私たちスポーツユニオンの多くの仲間をお招きいただきまして、誠にありがとうございました。この七十五年という長き間、非常に良いことも素晴らしいこともたくさんあっただろうと思いますけれども、しかしクラブの存続が危ぶまれた時もあったのではないのでしょうか。しかしその時その時の現役の方々が一歩を食いしばって、死に物狂いで頑張られたその姿を、その当時の卒業生の方々が物心両面支えられたからこそ、本日をお迎えになられたと思います。

人間を大事に育てて、そして世界に通じる選手を世に送り出したい、そしてまた先ほどからお話がありましたように、人間形成をして、立派な同志社人を世に送り出したい、というのが私たちスポーツユニオンの目的でございますが、航空部さんもまさしく世界に通じる立派な先輩を世の中に送り出されておられますし、また日本のために、同志社のために、色々とされておられることが、感銘を受けるところでございます。

先ほどから少し話が出ておりますけれども、先だってグライダーに乗せてやろうというお誘いをいただきました。本当に残念ながら台風のせいで中止になってしまいました。先ほど千 玄室大工匠がお話しになっておられましたけれども、ジェット機とか戦闘機に乗れ、と言われるとちょっとお断りをするかもわかりませんが、グライダーは大空を千の風に乗って悠々と飛べるのですから、

楽しみにしておりましたけれども残念でございます。また今年の春に、明德館の前で新しいグライダーのお披露目会がございました。八田学長がお話しになっていましたように、その時に八田先生が命名式をされました。その時現役のカプテンが挨拶をしたのが本当に今まで私の胸を打ってずっと残っております言葉が、実は私たちは死に物狂いに練習をして、そうでしょう、危険と裏腹に頑張っておられるその姿、そのままの勢いで全日本の選手権に臨むけれども、どうしても優勝ができない。何時でも六位だ。六位でも十分だと思えます。全日本で六位を取られたというのは本当に立派だと思うのですが、なかなか優勝できない、それは何かと聞きますと、実は他大学は立派な機種を持っている、これでどうしても勝てない。ところが本日、日本で最高の機種を買っていただいた、ましてやそれはドイツ製の機種だ、ということでそのカプテンが、もうこれからは決して負けない、もう後は優勝だけだ、という力強い挨拶をされたので、私は今年の秋は楽しみだなあ、良い話が聞けるかなあ、と思っているのですけれども、もう秋です。なかなか聞かないのですけれどもいかがでしょうか。

三月十一日に東北地方に未曾有の震災がありました。多くの尊い命が亡くなられ、未だ四千名弱の行方不明者がいらっしやいます。どうか一日も早く、元気で明るい復興ができますように願ってやみません。おかげさまで私たちスポーツユニオンもすぐに各クラブにアンケートを出して、クラブは皆どうだ、という話を聞きましたら、おかげさまで震災に遭った部活はあまりないということで、ほっとしております。それで、実のところ、私たちが三月十八日に名古屋でスポーツユニオン

の東海支部の総会がありました時、皆様方をお願いをして義援金を募集いたしました。多くのお金を頂戴いたしましてそれは中日新聞を通して日本赤十字社にご寄付を致しました。実はこのひと月前、台風が随分日本を襲いました。特に台風十二号はこの近畿地方に大きな被害を与えました。私は台風十二号の被害の中で奈良県十津川村が非常に気になっております。実は新島先生がお亡くなりになるちょうど五か月前、明治二十九年の八月十八日から二十日にかけて、奈良県十津川村に大きな水害がございました。百六十八名の方々が亡くなられ、ほとんどの家屋が全半壊をしました。当時のお金で約百万円の損害だったようですけれども、新島先生はすぐに十津川村の役場に三円のお見舞い金を持っていかれました。その金額は、現在の百億円くらいの損害だったのではないのでしょうか。そうすると、三億円のお金を新島先生が持って行かれたということで、すごいなと思っております。それで私たちも、名古屋だけ迷惑かけていたらいけないということで、藤原理事長と相談をして、全クラブにお見舞い金をお願いいたしました。多くのお金をお集めいただきました。それで、実際本来東北地方から学びに来ている六二名の学生さんには、学校がそれ相応の援助をされているようですけれども、実際その方々には、生活費は誰も面倒を見ていない。それでそういう方々に少しでも力になってあげたいということで、私たちはその大きなお金を、航空部さんにも随分していただいたようでございますけれども、その学生さんたちに使っていただこうと思ってお寄付をさせていただきます。本当にありがとうございます。

もうひとつだけ感激したことがございます。実

はこの会場に入らせていただく前に、卒業生の方々、現役の方々が、本当に温かく私たちを迎え入れてくださいました。これは日ごろ、山口部長先生、政OB会長含め、役員の方々、それに森川監督はじめコーチの方々が、勝つだけではなくて人間教育、道德面の教育をしっかりとご指導されているおかげかなと思います。本当に気持ち良く入場させていただいたことに心から感謝したいと思います。

どうぞ航空部さんが今後ますます、八十、百年とご活躍されますように心からお祈りして、私の一連の挨拶とさせていただきます。おめでとうございました。



## 日本学生航空連盟専務理事 吉田 正克様祝辞

只今ご紹介頂きました、日本学生航空連盟の吉田でございます。本日は同志社大学体育会航空部75周年記念式典を開催されますこと、日本学生航空連盟を代表して心よりお祝いを申し述べさせて頂きたいと思っております。日本学生航空連盟も昨年創立80周年を迎えました。

貴部も今年で75周年を私共と同じ歴史を歩まれている。そしてここにお集まりの皆様方、諸先輩の努力もありまして、今や日本の学生航空会の雄としての地位を確立されたわけと、ご同慶に堪えません。さきほどの皆様方のご祝辞等々をうかがっております、総長先生、学長先生、OB会長様、皆さん揃って航空部に激励を送られた、総長様は今年の全日本学生選手権は絶対に勝てるところいう力強いと言いますか、皆様の目標を示されました。

さきほど新しいグライダーを拝見しました。あのグライダーは現在、日本学生航空連盟加盟約60校、登録機数が約150機のグライダーの中でも、最新、最新鋭、世界でも、これ以上のグライダーは、今ありません。そういう意味で、さきほどの総長先生を初めとする激励と、最新鋭機を持って出場される今年の日本学生グライダー選手権大会は大変に盛り上がり期待し、頼もしく思っております。私事でございますけど、私は日本学生航空連盟の専務理事を拝命しておりますが、実は個人的には慶応義塾体育会航空部の総監督をやっております、さきほどのお話とあの新鋭機を見まして、今年はこれは慶応もまずいかな、というふうに変な内心脅威に思っております。

グライダーというスポーツはもともと個人スポーツであります。それがこのように体育会の部として認知されて、日頃の学生諸君の訓練のその

成果をもって頂点であります全日本学生グライダー選手権大会、あるいはその他のいろいろな競技会、それから関関同立といった対抗戦、それに母校の榮譽を担って、参加して、そして戦うという。まさにこれは団体スポーツに今、なりました。そういう意味ではほとんどの大学が組織的にグライダー活動をやっているというのは世界においても日本だけの大変に独自の航空文化を築き上げているというふうに感じております。そういう意味で、益々これからの皆様方の活躍を期待したいと思っているわけでございます。

ちなみに日本学生航空連盟は昭和5年に創立されましたが、戦前、戦後を通じて、朝日新聞社様の手厚い庇護といえますか、大変にお世話になってやってきたわけでございますけれども、これが今年の7月から朝日新聞社様の傘の下を離れまして、独自の組織運営を行っております。今最大の目標といたしましては総務省の公益法人設立です。我々としましてはその法人活動を通じまして、加盟60校の学生諸君により高い航空スポーツのサービスを提供するというを心がけていきたいと思っております。その意味では是非、同志社大学体育会航空部におかれましては、皆様の研鑽努力頂きまして、益々学生航空界発展に寄与して頂きたいと念じますとともに、本日はお集まりの皆様方におかれましては学生航空により一層のご指導、ご鞭撻、ご支援賜りますことを甚だ高い席からではございますが、ご祝辞とともによろしくお願ひしたいと思うわけでございます。本日は本当におめでとうございました。

## 実行委員長謝辞

75周年記念事業実行委員長 新庄博志

今回の75周年の準備をさせて頂きました実行委員会委員長を務めました、62年度経済学部卒業の新庄でございます。本日は皆様、この秋の本当にお忙しい中、あえて我々の航空部の75周年にご出席頂きましたことを、本当に心から感謝いたします。ありがとうございました。

大学からは、大谷先生、八田先生をはじめ、関係者の皆様にお揃いいただき、また、ユニオンの濱会長をはじめ、多くの御歴々、体育会の我々とともに志を同じくする者として、ご参加いただいた、多くの監督、OB会長様、本当にありがとうございました。日本学生航空連盟からは、吉田専務理事をはじめ、監督、コーチが多く駆けつけて頂きまして、この会場に華を添えて頂きましたことは、本当に我々準備をした者として、喜びにたえないものでございます。ありがとうございました。

今回の、この75周年には、いくつかの点で皆様に、メッセージとして伝えたいことがございます。一つは75周年という長きを皆様に感じていただきたいという思いで、千玄室様にお出ましましたきまして、創部当時、また我々の諸先輩が、大戦を経験された当時の状況をお話いただくことを致しました。温故知新、旧きを尋ね、新しきを知って頂くとういうことを考えました。もう一つは、我々航空部というのは、体育会そして学内の中でも、「航空部さん何をしてはるの、どこで飛んではるの、どんなんで活動してはるの。」というお声を常々お聞きしておりました。この75周年を機に我々の活動を多くの学内の皆さん、そしてユニオンの皆様に承知していただきたい、そして昔ご活躍されました先輩にも、今の航空部の姿を知って頂きたいという思いで、式典そしてこ

の懇親会を組み上げました。時代が変わるにつれて、我々の活動も常々変化しますけれども、現状の航空部を認識していただけた、垣間見ていただけたかなと思います。また後ろに控えておりますこの、ASW28、我々の悲願であります全国大会の優勝に向けて、翔友会員の皆様から本当に多くの志をいただいて、こうして学生に渡すことができました。機材だけが大会への道ではありませんが、やはり、馬なくしてはなかなか勝てない分もでございます。これで我々も、十分な機材、機体もそろいましたので、これからの活躍を願うところでございます。もう一つは安全に、そして正確に活動を続けてもらって、この75周年の歴史に恥じないようにがんばって欲しいと思います。

同期の一人に松岡というのがいます。62年卒の、我々二人で、委員長、そして事務局長ということで、今日ここまでなんとか完成することができました。やはり同期というものはいいものです。こういったことを感じさせてくれるのも、航空部あってこそ、同志社大学あってこそ、我々がこういった思いで今ここに立たせていただいていると思います。これからも同志社のために、そして航空部のためにがんばって活動を続けていきたいと思えます。我々のこの気持ちが、今日現役にメッセージが伝わったものというふうに思っておりますので、これからもここにお集いの皆様もどうか末永く学生の支援、そしてまだ見ぬこれから入ってくる学生に、期待をして頂きたいなというふうに思えます。本日は長時間にわたりまして、この場にお残りいただきましてありがとうございました。これからもご支援よろしく願いいたします。ありがとうございました。



## 75周年記念事業の総括

記念事業実行委員会 委員長 新庄博志

【2011年10月22日土曜日 京都全日空ホテル平安の間】

当日の京都は生憎の天候でしたが、事前の打ち合わせ通り準備をすすめました。学生も含め実行委員のひとり一人が、当日の役割分担を認識しており、淡々と会場設営ができました。総責任者が手持ち無沙汰になるぐらいが丁度いいものです。

会場は25年前の創部50周年の式典と同じ平安の間です。会場選定にあたっては、京都市内のいくつかのホテルを訪ねて廻りましたが、展示用の機体搬入の容易さは他のホテルに無く、必然的にここに決まりました。機体展示が珍しいこともあって、ホテルも至極協力的に接してくれました。

受付が始まっても大きな混乱もなく、ホワイエは懐かしい顔で溢れ、ご来賓が興味深く新鋭単座機 ASW-28 の展示を見学されていました。学生がご来客にしっかりと挨拶、対応できていたことは評価できます。彼らも事前に、打ち合わせがうまく出来ていたのでしょう。

### 【記念講演】

予定通り13時30分、記念講演の部を始めました。初めに開会のご挨拶を、翔友会の名誉会長である小野哲先生にお願いしました。先生におかれては、近頃は体調が芳しくないとお聞きしておりましたので、当日もお越しいただけるか危惧しておりましたが、久しぶりに先生の潑刺としたお声をお聞きし安堵いたしました。私が現役の際は、折に触れ創始の頃のお話を頂戴しておりました。先生のお話に心がタイムスリップしたのは私だけではないと思います。熱の籠ったご挨拶は、時間を管理する者にとって冷や汗がにじみましたが、最後は千玄室氏のお話、見事につないで頂きました。

記念講演のゲストは茶道裏千家15代家元でおられる千玄室氏です。「私の飛行経験」という題目で戦中のお話を中心に講演いただきました。氏は航空部の直接のOBではありませんが、天虎訓練所時代に、我々の先輩と一緒に飛行訓練をされたご縁で、50周年の時も翔友にご寄稿頂いています。当日は後のご予定も控えた中、時間を惜しんで最後まで熱心に語りかけていただきました。実は5年前に国際ロータリーの会合の席で、講演を直接お願いしたところ、たいそう喜んでいただき、その後お会いするたびに、まだかまだかとお声を掛けていただきました。氏も若き日の話を、「よーそろー」や「あて舵」の解る相手の前で話が出ることを、楽しみにしておられたのだと思います。話を終えられ、「今日はありがとう」とおっしゃって、たいそう上機嫌にタクシーに乗り込まれました。我々こそ感謝の念に絶えません。創始の頃のお話を、お二人から直接お聞きすることは、過去を顧みる今回の周年の大切な目的でした。

我々の先輩方が、国難の時代を必死に走り抜けてこられたことを、参加者も胸に深く留める事が出来たと思います。お話をしていただいた方も、話を聞く側も、どちらも喜ばしい記念講演になりました。

### 【記念式典】

引き続き、記念式典の部は、政志郎翔友会会長と山口博司部長先生のご挨拶で始めました。お二人には、まさしく現在の航空部を語っていただきました。また、ご来賓には同志社総長の長谷川実先生、学長の八田英二先生も駆けつけていただき、華を添えていただきました。同志社スポーツユニオンの濱直樹会長、日本学生航空連盟の吉田正克



専務理事からも温かいご祝辞を頂戴しました。

今回の式典は、映像を使ったプレゼンテーション型の設営を試みました。ご来賓・ご来客の皆様も、航空部の名前は知っているものの、中身は全く分からないのは当然で、また近年の訓練体系や活動は、以前に卒業された方々には馴染みの無いものです。そこで、教官団に活躍願って、パワーポイントを駆使し、グライダーの解説や、競技・訓練方法を紹介しました。この式典の狙いもここにありました。大学やスポーツユニオンに、今の航空部の存在を再確認してもらえる良い機会となったと思います。

後先になりますが、この式典では黙禱の前に、物故会員も映像でご紹介しました。懐かしい方々のお顔を拝見できたとともに、周年をもう少しお待ちいただけたらと、慙愧に堪えない思いです。余談ですが、あるご来賓が帰り際に、「航空部はお一人おひとりを大切にするクラブなんですね。」と声を掛けていただきました。そういうクラブのDNAを植えつけていただいた過去の指導者の皆様に敬意を表するところです。

### 【祝賀会】

祝賀会の部は、部の未来を期待できるよう組み立てました。新たに翔友会の東海支部長になられた坂田博先輩のご挨拶で始まり、乾杯の発声は、今ではすっかりお役目が板に付かれた窪田昌三顧問がされました。併せて、牧野鐵五郎先輩の航空亀齡賞のお披露目も出来たことは、たいへん喜ばしいことです。祝宴中は各テーブルにお酒を注ぎに廻りました。労いの言葉もたくさん頂戴しました。久しぶりの再会に、もっとゆっくりとお話したいところでしたが、残念ながら役目が許してく

れないことは仕方の無いことです。でもご来場のお一人おひとりの顔が満足そうな表情でしたので、会の成功を確信することが出来ました。

祝賀会の料理の評判も好評でした。実は現在の京都全日空ホテルの料理長は25年前の50周年をこのホテルで開催したときに、若手スタッフとして携わったそうです。当時もグライダーの展示がされていたことを懐かしく記憶しておられ、今回腕を振るっていただきました。

また計画当初は、応援団の演舞をお願いして、会場を盛り上げる計画もありましたが、心配もせず、会場はあちこちで懐かしい談議に沸いていました。

後段は現役部員の紹介、キャプテンの挨拶です。25年前は唐突に私が指名され、何をしゃべったかも記憶には残っていません。今回は、現役キャプテンの村瀬君に8月頃からプレッシャーを掛け、挨拶の準備をしてもらいました。おかげで誠に立派な挨拶をやったのけてくれました。私も負けじと閉会の挨拶をさせていただきました。たくさんの拍手を頂戴したことは覚えています。やはり挨拶というものは、本人は記憶に残らないものようです。

最後のカレッジソング斉唱は、応援団OBOG会長の稲田秀一様にリーダーをお努めいただきました。会場内が一体感に満ちて、会は18時に無事終了することが出来ました。終了後、全員で撮った集合写真は、後世の大きな記念になることと思います。

### 【周年のコンセプト】

以前にも触れましたが、今回75周年の機軸を温故知新に置きました。記念講演では過去…創部の

頃のお話を中心に。式典は現在…活動をプレゼンテーションで表現し、祝賀会は未来…学生にエールを送る。という流れで組み立てました。180名に及ぶご参加者の皆様には、長時間のお付き合いをいただきましたが、時間の経過も苦にならず、概ね評価をいただいたものと自負しております。また大学やスポーツユニオンも含め、部の対外的な認知度を高めることも、周年事業の大きな目的でした。認識が深まることは、現役の活動の大きな支えになってくれるに違いありません。

加えて、当日は多くの OGOB の皆様にも支えていただきました。特に、受付関係は瀬川 OB、記念講演・式典は松岡 OB、祝賀会は太田 OB。私が多くを指示せずとも、各自が責任を持って取り仕切ってくれました。思えば学生時代から、彼らは任せておけば、何事も卒なくこなしてくれていました。25年の時を経て、同じ結果に満足しています。

また、司会の能津さん橋本さん。MBS のアナウンサー西村麻子さんのお力も大きいものでした。松岡事務局長の一目ぼれで、彼女以外に余人は在らずと、猛アプローチで口説き落としてくれました。記念講演から式典、祝賀会まで、小さいお子様もおられるところ長時間の拘束で、たいへん申し訳なかったのですが、意を汲み積極的に盛り上げていただきました。当初から出来れば内情の解った方を、と司会者を探しておりましたところ、彼女は陸上競技部 OG で、ユニオン関係者とも顔馴染みでありましたので、会場内を常に穏やかな雰囲気にしてくれました。

#### 【実行委員会】

記念品の DVD はもうご覧いただけただしょう

か？

大阪の学連事務所が閉鎖され、預った資料の中に大量の 8 ミリ映像が出てきました。それと、近年の活動を学生に記録させていたものを、太田 OB、松本 OB の活躍でまとめてくれました。恥ずかしながら私も、初めてプライマリーが飛んでいる映像を見ました。将来への一級の資料となったと思います。また絵葉書や USB メモリーも、どうぞ愛用いただけたらと思います。

決算では、ほぼ当初の計画通りすすめることができました。この 5 年間の総収入は 9,556,827 円。総支出は記念事業、式典、祝賀会とも、ホテルのご協力と、講師千玄室氏のお計らいで、大きく減額することが出来、7,273,911 円となりました。したがって、余剰差額は 2,282,916 円となり、うち 100 万円は学生の新機体購入費の補填に、残りは翔友会に預け、学生の支援に当てるものとさせていただきます。

何よりも 4 年間に渡り、年間 2 万円のご厚志を続けていただいた OBOG の皆様のおかげです。しかも別途多額のご温情を頂戴した方も多数おられ、感謝の念に絶えないところです。

実行委員会の開催は 21 回を数えました。委員の皆さんは毎回遠方にも拘わらず、また休日を返上して集まっていただきました。たくさん目で課題をひとつ一つ確認し続けてきたことが、結果的に大きな失敗をせずに済めたものと思います。記念バッチに始まり、リトリートセンターでの合宿、OB 飛行会など、たくさんの方のプレ事業で機運を高めてもらえました。各地で、小さな新年会や忘年会を開いていただいた事も、うれしい限りです。幹事さんはたいへんでしょうが、この周年が終わっても、引き続き開催していただきたいもので

す。

#### 【新鋭機 ASW-28】

新機体の購入は、周年のタイミングでないと募金、寄付金が集まらないことは明白でした。あてがいぶちに機材を学生に渡すことに、当初は随分異論もありました。そこで現役強化の観点から、学生と教官団がその必要性を導いてくれました。自分たちの活動に必要なものは自分たちで整える。それが学生自治の基本姿勢だと思っています。機体選定に当たっては、森川監督をはじめ現役教官団の判断で十分ですし、導入のタイミングも彼らに任せればよいと思っていました。周年の予算から結果的に400万円を渡すことが出来たことは、実行委員会としての責任が果たせたものと思っています。ただ、聞くところによると、学生側の資金積み立てが滞っているとの事。飛ぶことも大事ですが、これかの彼らの人生を考えると、責任を果たす努力を身に付けてもらいたいものです。

#### 【お礼にかえて】

最後になりましたが、記念すべき事業の担い手として、私を指名いただいた牧野鐵五郎先輩に感謝いたします。また、政会長、窪田顧問、南村幹事長には常に高所大所のご指導をいただきました。本来学生も含め、実行委員のおひとりずつ名前を記して御礼を申し上げるべきところですが、どうかご容赦ください。そして何よりも、事務局を預かってくれた同期の松岡慎二には返す言葉もありません。予算管理、資料整理、各種案内等。彼の支えなくしては、この事業の成功は無かったことは明白です。感謝しています。卒業してからもこのような関係が出来るのは、人生の大きな財産で

す。そのためには学生時代の活動の充実が必須要件です。学生諸君の新たな挑戦と今後も真摯に活動する覚悟を期待して、75周年を閉じたいと思います。ありがとうございました。

---

### 記念事業成功の立役者二人

事業の完遂には多くの委員や翔友の協力のお陰であったが、この二人の熱意がこれを成功に導いた。



新庄委員長



松岡事務局長

# 75周年実行委員会総決算書

75周年実行委員会につき、下記の通り決算報告いたします。

2012年2月26日

75周年実行委員会委員長 新庄 博志

	記
総収入	9,556,827円
総支出	7,273,911円
収支差額	2,282,916円

以上

## 監査報告

2012年2月26日、新島会館にて、実行委員長立会いの下、75周年実行委員会会計監査を実施いたしました。

諸票、諸帳簿は適正に記載、処理されていまして報告いたします。

2012年2月26日

75周年実行委員会監査 南村 清治

# 航空部75周年実行委員会予算 収支修正予算 執行状況表

(自：平成20年3月1日 至：平成24年3月31日)

収入の部		(単位：円)	
科目	予算額	備考	備考
別途会費	4,928,000	80,000円×280名×22% 20、21、22、23年度	
登録料 (祝賀会参加費)	1,800,000	10,000円×180名(祝賀会参加者)現役30(半額負担)、OB 等120、来客30(学連、他大学、家族含む)	
祝い金	700,000	当日の学外、学内来賓70(1万円見当)	
寄付金	2,000,000	個人・企業	
雑収入	100,000	預金利息、事業収入、インセンティブ他	
合計	9,528,000		
内訳	実績	予実差	備考
H20	1,200,000		63人
H21	1,420,000		62人
H22	1,150,000		61人
H23	1,600,000		63人
合計	5,370,000	442,000	
¥10,000×102名(OB) ¥3,000×19名(学生)	1,020,000		
合計	1,077,000	-723,000	
合計	591,000		43名(講師千玄室氏含む)
合計	591,000	-109,000	
個人寄付 バッチ売上	1,440,000		牧野鐵五郎様他 ¥10,000×40個
合計	1,840,000	-160,000	
リトリート 利息 DCカードインセンティブ	675,500 3,327		2012.01.05現在 2008年 ¥48,198 2009年 ¥35,059 2010年 ¥14,226 計 ¥97,483 本金は親友会へ編入
合計	678,827	578,827	
合計	9,556,827	28,827	

支出の部		(単位：円)	
科目	予算額	備考	備考
会議費	50,000	10,000円×5年	
事業費 (事業細目参照)	8,300,000		
事務局費	50,000	備品等	
事務費	500,000	通信費、消耗品費等	
雑費	50,000		
予備費	50,000		
余剰金			
合計	9,000,000		
内訳	実績	予実差	備考
合計	0	50,000	
合計	6,843,946	1,456,054	
当日講師手土産代 名刺シート 謝礼袋	6,300 600 840		
合計	7,740	42,260	
ビデオカメラ費 案内状(送付費用含) 切手、封筒、通信費、他 当日お礼状	144,197 122,478 134,395 11,000		本体 ¥123,000、修理費 ¥21,197 300枚×2(往復葉書) 200枚
合計	412,070	87,930	
OB 謝礼土産代 振込手数料 銀行カード作成費	6,900 2,205 1,050		
合計	10,155	39,845	
合計	0	50,000	
合計	2,282,916		
合計	9,556,827		

## 事業費細目

(単位：円)

科目	予算額	備考	内訳	実績	予実差	備考
現役事業・強化費	3,000,000	新機体購入費	合計	3,000,000	0	①H21.7.14 ②H22.1.19 ③H23.1.19 一園徳夫氏からは、別途機体費用として、大学を經由し現役へ300万円寄付
記念式典・事業費	550,000	会場設営費(花、プロジェクター等)10、講師謝礼50、来賓・学生補填代15	講師謝礼(壬氏) 司会謝礼(西村氏) プロジェクター、スクリーン借用費 弁当	0 50,000 20,000 11,524		瀬川氏知合い個人借用 当日昼食代
ホテル会場代 祝賀会費用	2,500,000	参加者負担金(会場費、看板、食事代)	飲食費 会議室、控え室使用料 設備使用料 印刷看板 カメラヒスト料 消費税	81,524	468,476	
記念誌	300,000	翔友追加費用	合計	1,740,000	760,000	
記念品	650,000	表彰者・高額寄付記念品20、当日記念品制作費25、バッチ20	翔友75周年記念号補助 合計	300,000 300,000	0	
広報渉外費	600,000	記念DVD作製費、当日のパンフレット	バッチ製作費 当日記念品製作費 当日記念品製作費 当日記念品他消費税	201,600 204,400 52,800 14,200		300個 USBメモリー(2G)×200本 機体葉書 7種類×300枚
プレ事業費	700,000		合計	473,000	177,000	
合計	8,300,000		DVD製作費 空撮費用 当日パンフレット 合計	525,000 23,300 13,000 561,300		300セット 200枚
			リポート 合計	688,122 688,122	11,878	①H18.10 ②H19.8 ③H20.10
			合計	6,843,946	1,456,054	